NO. 190　　令和5年9月25日

きこえとことば通信

立川市立第七小学校 校長 島村 雄次郎
ことばの教室
TEL(FAX) 042-527-3627(直通)

立川市立第八小学校 校長 藏重 佳治
きこえとことばの教室
TEL(FAX) 042-536-9664(直通)

朝夕の風の涼しさに秋を感じるこの頃です。2学期の通級が始まり、子どもたちは学校行事の準備の様子や、家庭での出来事についてなど、楽しい話をたくさん聞かせてくれています。

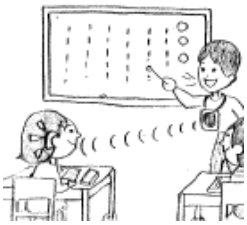
さて、今号は「難聴」について、指導方法や支援の具体例などを紹介します。難聴とひとロに言っても、聞こえの程度や聞こえ方は様々で、それによって支援方法も変わってきます。きこえとことばの教室では、一人一人のお子さんに合ったより良い支援方法を、保護者の方や在籍学級の担任の先生、医療機関などと連携しながら考え実践しています。

難聴とは

難聴とは聞こえにくい状態のことを言います。大きく感音性難聴と伝音性難聴に分かれ、程度は軽度難聴～重度難聴に分類されます。また片耳だけが聞こえにくい片耳難聴や突然聞こえにくくなる突発性難聴、中途失聴や老人性難聴などがあります。

聞こえにくい状態を補ってくれるのが補聴器や人工内耳です。音を増幅させることで、聞こえにくさをサポートします。補聴器や人工内耳も、年々技術は進化し、新しい機能がどんどん増えています。近年は、スマートフォンのアプリから設定を調整したり、Bluetooth で音楽や電話、テレビの音をダイレクトに補聴器や人工内耳に飛ばしたりすることができます。また、補聴器の機能も併せもつハイブリット型の人工内耳も登場するなど、より便利になってきています。

学校の授業の場面で活躍しているのがデジタル補聴システムです。補聴器や人工内耳は必要のない騒音までも大きくしてしまうため、色々な音があふれている教室内では先生の声が聞きとりにくくなってしまいます。そこで、このシステムを使うと先生の声がマイクを通じてダイレクトに児童の補聴器や人工内耳に届きます。



聞こえているようで、聞こえてない

～滲出性中耳炎や片耳難聴の子どもたち～

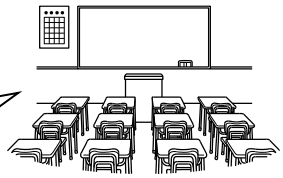
滲出性中耳炎は、鼓膜の内側に液が溜まってきこえが悪くなる、子どもがかかることの多い病気です。悪くなるといっても、聴力は軽度難聴から正常値の境目程度のため、1対1の会話ではそれほど困りません。また、学校生活でもみんなの様子を見て動いていれば、聞こえにくいようには見えません。しかし、クラスのざわめきの中では、聞きたい言葉が聞き取れない、一生懸命に聞くので疲れやすい等の困難があります。片耳だけが難聴の場合も同様で、さらに音の方向がつかめないという困難があります。（＊人は、両耳に届く音のずれから、音の方向を捉えています。）

このように、補聴器は必要ないものの、集団生活では聞こえにくい子どもたちがいます。幼少期からの場合、本人はよく聞こえる状態との比較ができません。まずは大人が、「聞き取れていないかも」と考え、聞きやすい環境を整えてあげて下さい。そして、本人に聞こえたかどうかを確かめることで、本人の自覚を促してください。

家庭や学校で次のような配慮をお願いします

・座席は、前から2、3番目や聞きやすい側（聴力の良い方）が良いです。
・大事な話は、静かな環境でお願いします。キーワードを復唱してあげるとより分かりやすいです。
・気軽に聞き返しても良いことを伝えてあげてください。
・話しかける時は、顔を見せて、やや大きめの声でお願いします。
　聞きとりやすいのは、ややゆっくりの速さの短めの文です。
・文字、絵、写真や図など、見て分かる工夫が有効です。

騒音防止のため、椅子の脚に古いテニスボールを付けることも有効です。



難聴児の指導　～両耳に中等度の難聴があるＡさん～

両耳に中等度の難聴があるAさんは、幼児の頃から補聴器装用を始め、保育園に入るころにはデジタル補聴システムの使用も開始するなど、補聴環境を整えた状態で小学校に入学しました。しかしながら、体を思い切り動かしたいAさんは、園や学校生活ではしばしばこっそりと補聴器を外して１日の大半を過ごすこともあったそうです。そのようなこともあり、言語の獲得は中々進まず、理解も曖昧なものが多くありました。

ある通級の日、Aさんは、「お誕生日プレゼントで『お化け』をくれるって、お母さんが意地悪を言った」と大泣きしながらやって来ました。お母さんに聞くと「お誕生日プレゼントのときに『おまけもあるよ』と言ったら泣いてしまったんです…」とのことでした。これは、「『おまけ』を『お化け』と聞き間違ったこと」「『おまけ』がどういうものなのか知らなかったこと」「プレゼントで『お化け』を渡すはずはない、と思えなかったこと」が理由として考えられました。そのため、どういうものであるかの説明や聞き分け練習を行うとともに、ごほうびシールを時々2枚貼って「とても頑張ったから１枚『おまけ』でシールをあげるね」「遊びの時間を『おまけ』して増やしてあげよう」と毎回の指導で使うようにしました。また、ご家庭や学校でも、『おまけ』を色々な場面で活用してもらいました。次第にAさんも意味を理解してきたのか「『おまけ』してあげるから、先生がもう１回やってもいいよ」と自分でも使うようになってきました。次の年の誕生日には「今年のプレゼントには『おまけ』はある？」とお母さんに聞くようになっていました。

言葉の学習を行う際に、言葉を正しい音と意味で覚えるのはもちろんですが、その覚えた言葉を実際に生活の中で正しく使いこなせることが何よりも大切です。そのために、通級では、教材をお子さんに合わせて取り組ませたり、実際に作業（調理や工作など）をしたりしながら、音、言葉、意味、動作等のマッチングを行い、実際にお子さんが言葉にたくさん触れ、そして使えるような時間を過ごせるようにしています。また、通級で学習したことを保護者の方と共有し、家庭でも取り組んでいただいたり、在籍学級の先生にお子さんの様子をお伝えしたりして、言語環境を支えていただけるようにもしています。

難聴理解授業

難聴のお子さんの指導は、在籍する学校での困り感を減らし、地域の友達と学校生活がスムーズに送れるよう、直接的または間接的に支援をしていくことを目的に行っています。通級による指導を行うことが直接的な支援とすると、在籍学級の友達に難聴のことを理解してもらうことが間接的な支援になります。

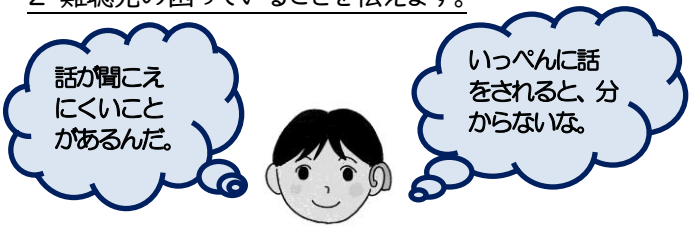
その一つとしてきこえの教室の担任が難聴児の在籍学級で行う“難聴理解授業”があります。

難聴理解授業とは…

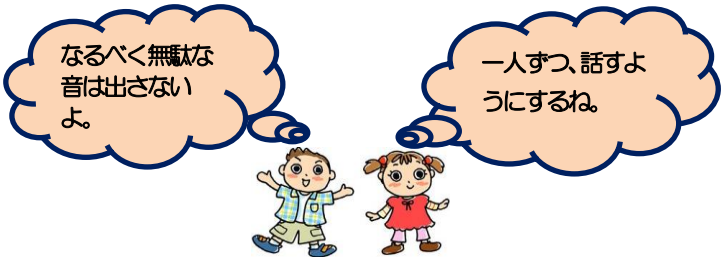
１ 難聴児の聞こえ方を学習します。

音が小さく聞こえるだけではなく、歪んで聞こえる事を視覚的に学習したり、人工的に作られた音で難聴児の聞こえ方を体験したりします。

２ 難聴児の困っていることを伝えます。



３ 友達としてできることを一緒に考えます。



４ 情報保障について学びます。

高学年になると情報保障（手話やパソコン要約筆記、筆記通訳等）について体験をしながら学習をします。

【授業を受けた感想】

聞こえにくいお友達は、いろんな事を頑張っているんだなと思いました。補聴器はすごく大きな音でした。聞きたくない音も大きく聞こえちゃうから、ぼくは、もううるさくしないようにします。（小2男子）